七つのラッパ

シリーズ～終末を生きる～

2018/7/8

ヨハネの黙示録８～９章

ヨハネの黙示録8章

小羊が第七の封印を開いたとき、天は半時間ほど沈黙に包まれた。そして、わたしは七人の天使が神の御前に立っているのを見た。彼らには七つのラッパが与えられた。また、別の天使が来て、手に金の香炉を持って祭壇のそばに立つと、この天使に多くの香が渡された。すべての聖なる者たちの祈りに添えて、玉座の前にある金の祭壇に献げるためである。香の煙は、天使の手から、聖なる者たちの祈りと共に神の御前へ立ち上った。それから、天使が香炉を取り、それに祭壇の火を満たして地上へ投げつけると、雷、さまざまな音、稲妻、地震が起こった。

さて、七つのラッパを持っている七人の天使たちが、ラッパを吹く用意をした。第一の天使がラッパを吹いた。すると、血の混じった雹と火とが生じ、地上に投げ入れられた。地上の三分の一が焼け、木々の三分の一が焼け、すべての青草も焼けてしまった。第二の天使がラッパを吹いた。すると、火で燃えている大きな山のようなものが、海に投げ入れられた。海の三分の一が血に変わり、また、被造物で海に住む生き物の三分の一は死に、船という船の三分の一が壊された。第三の天使がラッパを吹いた。すると、松明のように燃えている大きな星が、天から落ちて来て、川という川の三分の一と、その水源の上に落ちた。

この星の名は「苦よもぎ」といい、水の三分の一が苦よもぎのように苦くなって、そのために多くの人が死んだ。第四の天使がラッパを吹いた。すると、太陽の三分の一、月の三分の一、星という星の三分の一が損なわれたので、それぞれ三分の一が暗くなって、昼はその光の三分の一を失い、夜も同じようになった。

　また、見ていると、一羽の鷲が空高く飛びながら、大声でこう言うのが聞こえた。「不幸だ、不幸だ、不幸だ、地上に住む者たち。なお三人の天使が吹こうとしているラッパの響きのゆえに。」

ラッパの災いの前に

- 小羊によって第七の封印が開かれると、「天は半時間ほど沈黙に包まれた」
  - 新たな災いが起こるのかと思うと静けさが訪れた
  - “嵐の前の静けさ”か?
- 七人の天使に七つのラッパが与えられる
  - 新しい災いのシリーズが始まる
- 香炉を持つ天使に香が与えられ、「すべての聖なる者たちの祈り」とともに祭壇で献げられる
  - 祈りこそ神への献げものである
- 天使が祭壇の火を地上へ投げつける

ラッパの災い

- 第一のラッパ
  - 「血の混じった雹と火とが生じ、地上に投げ入れられた。地上の三分の一が焼け、木々の三分の一が焼け、すべての青草も焼けてしまった。」
  - 隕石のようなものが地上に落ち、植物を焼き払う
- 第二のラッパ
  - 「火で燃えている大きな山のようなものが、海に投げ入れられた。海の三分の一が血に変わり、また、被造物で海に住む生き物の三分の一は死に、船という船の三分の一が壊された。」
  - 流星が海に落ち、海の生き物が死に、船が壊れる

ラッパの災い

- 第三のラッパ
  - 「すると、松明のように燃えている大きな星が、天から落ちて来て、川という川の三分の一と、その水源の上に落ちた。この星の名は「苦よもぎ」といい、水の三分の一が苦よもぎのように苦くなって、そのために多くの人が死んだ。」
  - 更に大きな流星が落下し、水が汚染され、その水のため多くの人が死ぬ
- 第四のラッパ
  - 「すると、太陽の三分の一、月の三分の一、星という星の三分の一が損なわれたので、それぞれ三分の一が暗くなって、昼はその光の三分の一を失い、夜も同じようになった。」＞天体の異変が更なる災いを予感させる

ヨハネの黙示録9:1～12

第五の天使がラッパを吹いた。すると、一つの星が天から地上へ落ちて来るのが見えた。この星に、底なしの淵に通じる穴を開く鍵が与えられ、それが底なしの淵の穴を開くと、大きなかまどから出るような煙が穴から立ち上り、太陽も空も穴からの煙のために暗くなった。そして、煙の中から、いなごの群れが地上へ出て来た。このいなごには、地に住むさそりが持っているような力が与えられた。いなごは、地の草やどんな青物も、またどんな木も損なってはならないが、ただ、額に神の刻印を押されていない人には害を加えてもよい、と言い渡された。殺してはいけないが、五か月の間、苦しめることは許されたのである。

いなごが与える苦痛は、さそりが人を刺したときの苦痛のようであった。この人々は、その期間、死にたいと思っても死ぬことができず、切に死を望んでも、死の方が逃げて行く。さて、いなごの姿は、出陣の用意を整えた馬に似て、頭には金の冠に似たものを着け、顔は人間の顔のようであった。また、髪は女の髪のようで、歯は獅子の歯のようであった。また、胸には鉄の胸当てのようなものを着け、その羽の音は、多くの馬に引かれて戦場に急ぐ戦車の響きのようであった。更に、さそりのように、尾と針があって、この尾には、五か月の間、人に害を加える力があった。いなごは、底なしの淵の使いを王としていただいている。その名は、ヘブライ語でアバドンといい、ギリシア語の名はアポリオン（滅ぼす者）という。第一の災いが過ぎ去った。見よ、この後、更に二つの災いがやって来る。

第五のラッパ

- 「底なしの淵に通じる穴」が開かれる
  - サタンや悪霊たちの場所
- いなごの群れが現れる
  - 強靭だが敏捷かつ賢い兵器?
  - さそりが刺した時のような苦痛を与える
    ＞死にたいと思っても死ねない苦しみ
- 「額に神の刻印を押されていない人」にだけ害を与える
  - 7章に登場した十四万四千人のイスラエル人
  - 人々に悔い改めを迫る結果になる

ヨハネの黙示録9:13～21

第六の天使がラッパを吹いた。すると、神の御前にある金の祭壇の四本の角から一つの声が聞こえた。その声は、ラッパを持っている第六の天使に向かってこう言った。「大きな川、ユーフラテスのほとりにつながれている四人の天使を放してやれ。」四人の天使は、人間の三分の一を殺すために解き放された。この天使たちは、その年、その月、その日、その時間のために用意されていたのである。その騎兵の数は二億、わたしはその数を聞いた。わたしは幻の中で馬とそれに乗っている者たちを見たが、その様子はこうであった。

彼らは、炎、紫、および硫黄の色の胸当てを着けており、馬の頭は獅子の頭のようで、口からは火と煙と硫黄とを吐いていた。その口から吐く火と煙と硫黄、この三つの災いで人間の三分の一が殺された。馬の力は口と尾にあって、尾は蛇に似て頭があり、この頭で害を加えるのである。これらの災いに遭っても殺されずに残った人間は、自分の手で造ったものについて悔い改めず、なおも、悪霊どもや、金、銀、銅、石、木それぞれで造った偶像を礼拝することをやめなかった。このような偶像は、見ることも、聞くことも、歩くこともできないものである。また彼らは人を殺すこと、まじない、みだらな行い、盗みを悔い改めなかった。

第六のラッパ

- 「四人の天使が人間の三分の一を殺すために解き放された」
  - 終末までつながれていた悪の勢力
- 二億の強力な
  - 数えきれないほどの兵力
  - 「口からは火と煙と硫黄とを吐」く馬＞戦車?
- この期に及んでもまだ悔い改めない人々
  - 「これらの災いに遭っても殺されずに残った人間は、自分の手で造ったものについて悔い改めず、なおも、悪霊どもや、金、銀、銅、石、木それぞれで造った偶像を礼拝することをやめなかった」

ラッパの災い

① 植物が焼き払われる

② 海の生物が死ぬ・船が破壊される

③ 水が汚染され、人々が死ぬ

④ 天体が暗くなる

⑤ 底なしの淵からいなごが現れる

⑥ 二億の騎兵が三分の一の人類を殺す

ラッパの災い

① 植物が焼き払われる

② 海の生物が死ぬ、船が破壊される

③ 水が苦くなり人が死ぬ

④ 天体が暗くなる

⑤ 底なしの淵からいなごが現れる

⑥ 二億の騎兵が三分の一の人類を殺す

人類最後の
悔い改めの時

しかし悔い改めない人々がまだいる！